

鈴鹿国際大学での特別講義

『人間の尊厳』の根底にあるもの

——「世界の中の日本」——

1995年5月9日

奥田昌道

- 1、聖書は西洋思想の源流
 - 2、天地万物の創造の由来——創世記1・1～2・4
 - 3、人（霊止）の創造——創世記2・4～25
 - 4、個人の尊厳と婚姻——世界人権宣言
 - 5、社会生活における人の倫理——レビ記19・1～18
 - 6、人と神の関係——申命記10・12～21
 - 7、真理はあなたを自由にする——ヨハネによる福音書8・31～47
 - 8、御霊の導きによって愛の人にされていく——ガラテヤの信徒への手紙5・13～26
- 資料 「世界人権宣言」

●1、聖書は西洋思想の源流

皆さん、こんにちは。ただ今、かつての同僚の中沢先生から、あまりにも良く知り過ぎておられるので、赤面するようなこともいろいろおっしゃっていただきましたが、申し訳ありません（笑い）。そんなことで今日、この席に登場することになったのです。私も来年からは、この学校の専任教授になります。今年、皆さんにお目にかかるのは今日が初めてだと思います。去年は一年生の方々の「現代社会と法」という授業を受け持っておりまして、ずっと一年間お付き合いがありました。今年は二年生の「法と人権」、「民法」の二つの講義を月曜日に受け持っておりますが、一年生の諸君とは今日が初めてです。

「世界の中の日本」という主題で私は春と秋に一回ずつ講義をするように学長から言われておりまして、それで今回、第一回目ということになります。皆さん、資料を御覧になって、おやおやと思われたかも知れません。横書きのレジュメ、それから、立て組の資料と二つ配っていたいております。なぜ、おやおやということかと言いますと、資料の方では聖書の創世記から引用してあります。横組みの方も殆どが聖書の思想ということで聖書の根幹をなすようなところをピックアップして引用しております。それで、何のお話が出てくるのだろうとお考えになるかも知れません。

それから、もう一つは縦の資料に「世界人権宣言」というものを引いております。随分、時代の隔たりがあるわけです。この聖書の創世記と申しますと、古いところでは紀元前950年頃に編集されたということです。かたや世界人権宣言は1948年、第二次大戦後、これから世界が平和に向かって新しい出発をしようというときに、その前の国連憲章を踏



まえて、三年後に世界人権宣言が出されたわけです。ところが、この世界人権宣言というものにうたわれている理念は、さかのぼりますと、こういった創世記に始まる聖書に源流があるように見えるを得ない面があります。今日の主題であります「人間の尊厳」の根底にあるもの」という、「人間の尊厳」ということは、我々はもう教育を受ける当初から、人間の尊厳ということの重大さ、大切さを教えられてくるわけです。しかし、果して人間の尊厳というのはどういうことなのか、またそれが何に由来しているのか、そういうことについては、残念ながら、特に日本においては、そんなに深い考察がされているとは思えません。そこで皆さん、これから大学で勉強され——生涯、人生は勉強でありますけれども——そういう勉強をしていかれる上で、目を世界に広げ、特に西洋思想の源流というところにさかのぼって問題を考えるきっかけをつかんでいただきたい、そういう思いで今日の講義を準備いたしました。

それぞれ民族というものは、建国の歴史をもっています。あるいはそれぞれ神話的な形で、世界というものはどうやって創られたのか、という歴史や神話をもっています。今日、引用いたしました創世記はいうまでもなく、パレスチナのイスラエル民族に伝えられてきた天地創造の神話です。ところが、イスラエルというちっぽけな民族に、しかも古い時代から伝えられてきた伝承でんしやうと言いますが、その伝承が実は欧米の精神史、あるいは欧米文明の基礎を形つくつていているということに注意をしていただきたいわけです。つまり、ヨーロッパ文化だとか、ヨーロッパの精神史を理解しようとしたときには、この創世記とか、それに続きますイスラエル民族史——これは旧約聖書であります——そして民族史の中に現れた神の啓示けいじ——イスラエルの人たちはそれを神の啓示として受け取りました——その神の啓示の内容を正しく理解していくということが欠かせない必要条件になってまいります。

●2. 天地万物の創造の由来——創世記1・1～2・4

ここに引用しました創世記は、クリスチャンの方だったらもう当然何度も読んでいらっしやると思いますけれども、そうでない人にとっては、あるいは初めてかも知れないし、伝え聞いたかも知れませんが。アダムとイブの物語などは良くご存知だと思います。この創世記は、ここに引用したのは1章と2章です。これは実は二つの資料から成り立っています。1章の全部と2章の4節の前半、そこまでが一つの資料です。それからもう一つは2章の4節後半からの部分です。2章4節後半からの部分の方が実は古いので、これは紀元前950年頃に執筆されました。そして、前半の1章の部分は紀元前530年代以降に編集されたと言われています。この創世記は、言うまでもなく神話でありますから、決して自然科学的に天地はこのようにして創造されたと言っているわけではありません。神話という形をとって、そこに何か我々の胸を打つような深い真理が隠されている、というつもりで受けとっていた



だきたいと思うのです。ではまず、読んでみます。

天地の創造

《創世記第1章》

初めに、神は天地を創造された。地は混沌こんとんであつて、闇が深淵やみ しんえんの面おもてにあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。

「光あれ。」

こうして、光があつた。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第一の日である。

神は言われた。

「水の中におおぞら大空あれ。水と水を分けよ。」

神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があつた。第二の日である。

神は言われた。

「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」

そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「地は草を芽生めばえさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹かじゆを、地に芽生えさせよ。」

そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があつた。第三の日である。

神は言われた。

「天の大空に光る物があつて、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があつて、地を照らせ。」

そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があつた。第四の日である。

神は言われた。

「生き物が水の中に群むらがれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」

神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」



夕べがあり、朝があつた。第五の日である。
神は言われた。

「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、^は這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」

そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、^{うお}空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。

「見よ、全地に^は生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良^さかった。夕べがあり、朝があつた。第六の日である。《創世記第2章》

記第2章

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息^{あんそく}なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息^{あんそく}なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別^{せいべつ}された。

これが天地創造の由来である。(創世記1章1節〜2章4節)

ここまでは、神に仕える祭司^{さいし}たちの編集によるものです。イスラエルの歴史で言えば、バビロン捕囚^{ほしゅう}という一つの時期があり、バビロン捕囚が終わりましたのが紀元前538年ということで、それ以降に編集されたといわれている天地創造に関する物語なのです。これをご覧になりますと、どういうことを皆さん、感じられるでしょうか。第一日から第六日まで六日かかって天地万物を創造されたということです。

それから、順序をちよつと見て下さい。最初に「初めに」という。初めがあれば、終わりがあります。それで、終わりのことは、聖書ではヨハネ黙示録^{もくしやく}というところに書かれています。初めに」は、聖書の一番冒頭^{ぼうとう}の創世記です。私がここに引用していますのは、「新共同訳」と申しまして、カトリック教会とプロテスタント教会のそれぞれの聖書学者の方々



の協力によって成ったものです。その訳をここに引用しています。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」

これが最初の状態であつたというわけです。混沌で、闇がおおっている。そして、水の面を神の霊が動いている、そういう状態です。

それで、第一に神が創造されたのは何かと言えば、「光」なのですね。

「神は言われた、光あれと。そうすると、光があつた。」

と、ここに一つの思想が現れています。我々は何が一番欲しいかといえ、闇闇の中では、光が欲しいわけです。真つ暗闇の時に光が欲しい、それをここで、

「光あれと言われたら、光があつた」

という。これが第一日であります。それから、第二日目に創造されたのは、水から大空を分離されたということになります。大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。大空を天と呼ばれた。これが第二日です。第三日目に造られましたのが、土と植物です。乾いた所が現れてくる。水は一カ所に集まる。こうして陸地と海とに分けられる。水が集まった所を海と呼ばれる。そして、地は草を生えさせます。種を持つ草、それぞれの実を実らせる果樹、そういうものがそこに造られてまいります。次に第四日目に造られたのは、太陽、月、星などです。天体を造られた。それぞれ、昼を守る役目、夜を守る役目ということになっていきます。第五番目に魚と鳥、海の中の魚とか貝、それから空を飛ぶ鳥を造られた。そして、第六番目には、地上の動物たち、そして最後に人間ということになります。

つまり、人間というものは一番最後に造られています。一番大事な光と一番大事な人間が初めと最後に造られていることになります。そして、神は

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」

と言われた。27節の、

「神は御自分にかたどつて人を創造された。神にかたどつて創造された。男と

女に創造された。」

というところに人の創造というものが何であるかということが強調されて書かれていることがわかります。

神は見えない存在ですから、何も人間が有形的に神の形をしているわけではありません。

「かたどつて」ということはその内面性ということになります。

人の内面性が神の似すがたであります。神の似姿がどういふものであるか、一言で言えば、

私は「愛」だと思います。

愛を本質にしている姿です。愛ということについてはこれからずっと出てまいりますので、今はその程度にいたします。それから、



「男と女に創造された」

ということが出ております。そして、人間も含めて動物たちの食物は何かと言えば、種を持つ草、それから、果樹などです。決して、弱肉強食の世界ではなかったということがここにうかがえます。草はいくらでも生えてきます。果樹だって、果物をもぎ取っても、また次の年に果物を実らせることができます。そのように、全体を見ますと、鈴鹿の学園の風景のように、実にのどかな風景がそこに展開しています。そしてそれぞれの所にありましたように、造られたものは皆、

「良しとされた」

というのがあります。そして、一番最後の締めくくりに、31節

「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」

これが第六の日。そして最後に、

「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に、神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」

とあります。「創造」といいますのは、愛の業なのです。しかも、人間の造ったものは、すぐ消えて無くなるようなはないものが多い。ここでいう「創造」という言葉は単に物を造り出すというだけではなくて、

「造ったものがそのまま維持され存続し、永久に至るといふ質のものとして造る」

という概念だそうです。つまり、神が創造されるというとき、本当の愛を込めて造っていく。それで、

「造られたものはみんな良かった」

とあります。

これを皆さんの日常生活に、私も先生方も含めて、あてはめていただきたいと思います。本当に実りのある仕事をしたときには満足感があります。そして、やったことが甚だ良かったと、満足してゆつくり休むと、これは非常に嬉しい生活スタイルだと思う。ところが、現実の自分たちというのは、いつもやつぱりだめだったとか、ちつとも進まなかった、失敗ばかりしていたと、そのような嘆きが多い。あるいは、がむしやらに働いて働きまくって休みを取らない。すると、過労死ということにもなります。ヨーロッパの人たちは「過労死」という日本語を知っている。ヨーロッパの人たちはこの聖書を基本にしていますから、ちゃんと働く日と休む日をわけている。日本人はこういう思想がありませんから、働きまくるわけです。そうすると、ヨーロッパの人たちから見たら、日本人は異様に映ります。下手をすると「エコノミック・アニマル」と変な名前を付けて呼ばれてしまいます。

「金儲けはうまいけれども、少し気味の悪い人種である。あれは休むことを知らない」



い

ということになってしまいます。考えてみますと、我々の七日制、このごろは週休二日で、週五日制ぐらいになりましたけれども、だいたい月曜から土曜まで、学校でも会社でもみな仕事があります。日曜日は休むという、六日の間働いて七日目に休むというのは聖書からきているのです。これは特にあとで、モーセの十戒じゅうかいというのがあります。イスラエル民族が紀元前1290年頃にエジプトで奴隷状態でしたとき、モーセの導きによってエジプトから脱出していきます。そして、シナイの山でモーセは神の律法おきてをいただくという場面があります。その時に、

「六日間働いて七日目は休みなさい。これは神の安息あんそくの日だから、そのときは家畜も労働者もすべての人に等しく休みを与えなければならない」

とあります。

「どんなに忙しいときでも、この日は完全に休みなさい」

と。律法おきてになりますと、「働いてはいけなのかなあ」という受けとり方になるでしょうけれども、それは実は恩恵めぐみなのです。

「ゆつくり休みなさい。私が責任をもってあげるから、あなたはゆつくり休みなさい」

という神の祝福なのです。

動物たちにとっても家畜にとっても、日頃の重労働から解放されてゆつくり休むことができるという休息なのです。それで、「夕べがあり、朝があり」でしょ。昼は働き、夜は休む。それから六日働き七日目に休むという、ダッシュするときとエントシュパネン独 entspannen 緩めるするときと、緊張するときと緩めるときと、このリズムが交互にゆくと長続きする。マラソンだつてそうですよ。皆さん、テレビでマラソンレースをご覧になっていますと、25 km ぐらいまで先頭をリードしていた選手がいつのまにか、姿が見えなくなりますね。やや真ん中辺りあたにつけていた選手が段々上がって来て最後、ゴールに入るという光景を良く見ます。リズムが大事だということ。我々の生活にはやはりリズムが大事です。この頃のように、衛星放送があつて24時間、テレビで放送されていますと、寝る時間が無くなって授業の時間になると寝るのじゃありませんか（笑い）。

創世記1章の私の感想はと申しますと、

「このように神は創造された。それは非常に良かった。そして大変満足されて、

七日目にお休みになられた」

と。これは私たちの生活の中にぜひ取り入れたい面だと思います。

それから、もう一つ大事なことは人間のことです。



●3、人（靈止）の創造——創世記2・4～25

次に創世記2章の方にまいりましょう。2章4節から、これは別の資料で、神の名を「ヤーウェー」と呼んでいる人たちの手になるもので、「J資料」と聖書学では言われています。紀元前950年頃編集されており、こちらの方が古い。そして、この2章4節の後半部からはもっぱら人間の創造のことが書かれています。アダムとイブの物語はここからきています。読んでいきますと、

主なる神が地と天を造られたとき、地上にはまだ野の木も、野の草も生えていなかった。主なる神が地上に雨をお送りにならなかったからである。また土を耕す人もいなかった。

しかし、水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した。主なる神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらすあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。

エデンから一つの川が流れ出ていた。園を潤し、そこで別れて、四つの川となっていた。第一の川の名はピシオンで、金を産出するハビラ地方全域を巡っていた。その金は良質であり、そこではまた、琥珀の類やラピス・ラズリも産出した。第二の川の名はギホンで、クシュ地方全域を巡っていた。第三の川の名はチグリスで、アシュルの東の方を流れており、第四の川はユーフラテスであった。

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。

「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

主なる神は言われた。

「人が独りでいるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう。」

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへもつて来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名を付けたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった。（創世記2・4～20）

今、読みましたところは、神のことを「主なる神」という呼び名で呼んでいます。1章の方では、神は「神」と書いてあります。こういうところからも、別の資料だということ



が分かります。それはともかく、ここでは人間がどのようにして造られたかということ、土から、しかも土の塵ちりからなのです。皆さん、文句が出そうですね。

「何だ、おれは土の塵から造られたのか、土の塵から造られた粕かすじゃないか」と。いや、粕かすなんだけれども、その粕が

「神はその鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」と。ここに値打があるのです。

どんなに土の塵から造られた粕であっても、そこに神の命の息「神の霊」が吹き込まれて、生きる者「人」となった。インスパニア（英inspire 吹き込む）と言いますね。聖書は、

「人は土から造られた。だから、死んだら土に戻る」

という。聖書にはこの思想がずっと流れています。人は土から造られたのだから、やがてこの息が出て体を離れますと、また土に帰って行きます。しかし、息を吹き込まれた、inspire（インスパニア）された霊、これは人間の中心だということ。この人の霊、これは永遠不滅のものなのです。この霊がいつも神様と一緒になっていると、清い世界に生きていく。愛の世界に生きる。ところが、闇の世界に引きずり込まれると、大変なことをしでかす。そのことは、ここには引用しませんでしたけれども、次の創世記3章の蛇の誘惑へび ゆうわくのところに出てくるわけです。そして、人間は墮落だらくしていくというお話につながりますが、あれは神話ではありませんけれども、非常によく人間の本質を表しています。このinspire（インスパニア）、

「霊（命の息）を吹き込まれて人は生きる者となった」

ということを心に留めていただきたいのです。

日本に『大言海だいげんかい』という大きな辞書があるのをご存じでしょうか。富山房ふざんぼうという書店から戦前から発行されている大きな辞典ですが、そこに「人」という項目がある。それを見ますと、「ひと」の語源として、

「ひとは霊止ひと、霊が止まると、もともと人のことをこのように書いた」

とあります。そして解説として、

「神霊しんれいの止まる存在とど、これがひと、霊止ひとである」

と。神霊が止まっていなければ、それは人ではない。動物であるかも知れない、生き物ではあるかも知れないけれども、いわゆる人格としての人ではない。これは大言海という辞典の中にそのように書いてある。ですから、日本においても、言葉のことを言霊ことだまと言ったり、魂たましいのことを靈魂たましい（魂之霊）と読んだり、古来から非常に神秘的な思想は流れている。だから、さきほど、

「どの民族にもそれぞれの歴史がある。また民族のそういった信仰を要約する物語がある」

ということを申しました。聖書の方では、



「息を吹き込まれると、生きる者となった」

と、このことに気をつけていただきたい。

それから、もう一つは、ずっと見ていきますと、2章18節に、

「人が^{ひと}独りであるのは良くない。彼に合う助ける者を造ろう」

とあります。「助ける者」ですが、たくさん動物がいます。それを全部神様はアダムの所に連れて来られた。「どうだ、気にいったか」と。パンダもいたのか、知りませんよ（笑い）。いろいろな動物がいた。だいぶん、心を動かされてもやっぱり、「私の伴侶^{はんりよ}ではない、助ける者とはならない」と、アダムは失望します。

「主なる神はそこで、人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。主なる神が彼女を人のところへ連れて来られると、人は言った」（創世記2・21～23）

目覚めると、美しい女性が立っていた。アダムは感嘆の声を発するわけです。

「ついに、これこそ

わたしの骨の骨、

わたしの肉の肉。

これをこそ、女（イッシャー）と呼ぼう。

まさに、男（イーシュ）から取られたものだから」（創世記2・23）

ここに男女というものはもと一体であると。どこから出てきたかといえば、男から女が出たということになっていきますけれども、どっちにしてもそれは一体であると、このことが表明されています。お互いに他を必要とする。お互いに他の存在なくして、自分独りではあり得ないという存在です。

「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる。人と妻

は二人とも裸^{はだか}であったが、恥^{はにか}ずかしがりはしなかった」（創世記2・24～25）

ここに私は西洋におきます婚姻^{こんいん}、結婚というものの思想がよく現れていると思う。ご承知のように西洋は個人主義ということで非常に個人という人格を大切にいたします。日本はどこちらかといえば、集団主義ですね。何か、たくさんの中に埋没^{まいぼつ}していれば安心していきます。ところが、独りで立つということはどうも怖い^{こわ}というか、憚^{はばか}られる。だから野茂^の投手のように一匹狼でアメリカへ渡って活躍すると、ああいう非常に個性的な人は日本ではちよつと爪弾^{つまはじ}きにされますね。ところが、ヨーロッパでは個人です。

なぜ、個人かといいますと、さっきの神からinspire（インスパイア）（神の息が吹き込まれる）された存在なのだから、他人がどう思うかは問題ではない。

「あなたは、あなたという人格は他の人とは違うのだ。あなたは地上でただ独り、掛け替えのない尊い存在として造られている、inspire（インスパイア）されているの



だ」

ということ、個人というものが非常に尊重されます。

と同時に、ここで見落としてはならないことは、なるほど人格としては個人ですが、男女という面では、夫と妻、男と女というものは一体となつて、またそれが一つの単位である。男は女性を必要としますし、女性はまだ男性を必要とする。どっちが偉いかという問題ではない。これは、二人は一体なのです。そして、子孫が生まれていく。

「産めよ、増えよ、地に満てよ」

とありますように。こういう見方が創世記のところで表れている。そのことにも注目していただきたいわけです。

●4、個人の尊厳と婚姻——世界人権宣言

今この資料を見ていただいているついでに、世界人権宣言（1948年12月10日、第3回国際連合総会において採択）のところをちよつと見て下さい。

「第1条 すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもつて行動しなければならない。」

男であろうと女であろうと、また、どういう生まれであろうと、すべて人間は生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神——これは愛ということですね——この精神をもつて行動しなければならない。これが第1条です。それから第16条を見ますと、

「第16条

1 成年の男女は、人種、国籍又は宗教によるいかなる制限をも受けることなく、婚姻し、かつ家庭をつくる権利を有する。（以下略）

2 婚姻は、婚姻の意思を有する両当事者の自由かつ完全な合意によつてのみ成立する。

3 家庭は、社会の自然かつ基礎的な集団単位であつて、社会及び国の保護を受ける権利を有する。」

このように、世界人権宣言の第16条は婚姻ということを非常に重んじております。この起源は、私はやはり創世記にあるのではないかと推測いたします。昨今、個人主義の思想が強調されるあまり、家庭とか、そういう男女の結合としての婚姻というものの、結婚というものに対して、否定的な考えをする人が増えてきています。家庭は不自由である、もつと一人ひとり自由で、好きなきにくつついて好きなきに離れるのがいいのだという考え方。極端に言えば、セックスといった考え方がはびこつて来ておりますけれども、それは決して健全ではないと、私は考えています。廃墟はいきよの中から新しい世界秩序を造り上げよ



うと、人類がもう一度新しい理念をもつて、理想に燃えて、国際社会を造ろうという思いで宣言されたのが世界人権宣言だと思っています。

その中で「個人の尊厳」ということと、「自由」あるいは「平等」ということと、それから「家庭」というものを大切にすることとをここにうたっていることは、非常に意味が深いと考えております。

そこで、次に、レジュメの方に移っていただきます。今日、お話し申し上げたいことの要点があります。まず、「1 聖書（キリスト教）の思想」というところで、聖書から引用した一番目が旧約聖書の創世記1章～2章、これは今朗読したところです。そして、下のほうの①、②というところに、私の申し上げたい要点があります。一つは、

①人間は神によって、神にかたどって創造された。ここに「人間の尊厳」の根底がある。「神にかたどって」とは、有形的な形のことではなく、内面的な本質のことである。神の本質は「愛」だから、「愛」を本性とする存在として造られたわけである。

もう一つは、

②「人間」の尊厳は個人の尊厳であるとともに、人は男と女に造られ、

「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」

とあるように、夫妻が独立の一つの単位とされている。婚姻（結婚）を聖なるものとして尊ぶことにも注意を要する。

ということであります。創世記に関しては、以上であります。

●5、社会生活における人の倫理——レビ記19：1～18

次に旧約聖書のレビ記というところに移りたいと思います。レビ記というのは、さつき言いましたモーセが、エジプトでイスラエルの民が奴隷状態にあったとき、民を率^{ひき}いてエジプト脱出をいたしました。それからシンの荒れ野を経て三日目にシナイの荒れ野に到着します。そして、モーセがシナイ山に登って、神から律法^{おきて}をいただく、というくだりが出てくる。そういったことを背景として、後の時代に作成された文書、これがレビ記なのです。成立年代としては、だいたい紀元前6世紀の前半頃ということです。私がなぜこれを引用しているかといいますと、人間の尊厳ということの一つの、日常生活生活における具体的な姿がここに書かれているからであります。

「主はモーセに仰せになった。イスラエルの人々の共同体全体に告げてこう言いなさい。

あなたたちは聖^{せい}なる者となりなさい。あなたたちの神、主^しであるわたしは聖なる者である。

父と母とを敬いなさい。わたしの安息^{あんそくび}日を守りなさい。わたしはあなたたちの神、主である。（中略）



穀物を収穫するときは、畑の隅^{すみ}まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。ぶどうも、摘^つみ尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留^{きりゆうしや}者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

あなたたちは盗人^{ぬすめ}ではならない。うそをついてはならない。互いに欺^{あざむ}いてはならない。わたしの名を用いて偽り誓^{ちか}ってはならない。それによってあなたの神の名を汚^ししてはならない。わたしは主である。

あなたは隣人^{しんじん}を虐^{しいた}げてはならない。奪^{うば}い取^とってはならない。雇^こい人の労賃の支払いを翌朝^{あしたあさ}まで延^のばしてはならない。耳の聞こえぬ者を悪く言^いったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を畏^{おそ}れなさい。わたしは主である。

あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱い者を偏^{かたよ}ってかばったり、力ある者におもね^{おもね}ってはならない。同胞を正しく裁^{さだ}めなさい。民の間で中傷^{ちゆうしやう}をしたり、隣人の生命にかかわる偽証^{ぎしやう}をしてはならない。わたしは主である。

心の中で兄弟を憎^{にく}んではならない。同胞を率直に戒^いめなさい。そうすれば彼の罪を負^おうことはない。復讐^{ふくしゅう}してはならない。民の人々に恨^{うら}みを抱^{いだ}いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」(レ

ビ記19・1～18)

これは、紀元前1290年から1250年を舞台装置にしながら、編集されたのが紀元前530年代と言われています。どっちにしても今から2500年前の古い時代にこういう文書が編集されています。日本のそのころはどういう状態だったかということを思いながらこの内容を見ますと、人間の倫理として実に内容が高度です。非常に高い道德と申しましようか、そういうことがここであつたわれています。そのことに私は実は驚くのです。現代に全くそのまま通用するということが言えるような内容です。

それが一つと、それから特にこれはレビ記19章の特徴なのですけれども、それぞれの語りかけの後ろに

「わたしは主^{しゅ}である」

という言葉がある。これが単なる道德ではないということに気づいていただきたいわけです。イスラエルの民族にとりまして「神」とか「主^{しゅ}」というときに、それは人類^{ふへん}普遍の神とかそんな思いはない。自分たちがかつてエジプトで奴隷の苦しみの状態にあつたときに、指導者モーセを通してこの苦難の中から脱出せしめられ、助けていただき、そして今は自由の身となった、苦難からの解放^{たかも}を賜^{たま}った、そういう意味の具体的な救^{ぬし}い主^{しゅ}という意味において神のことを「主^{しゅ}」とか、「神」と呼んでいるのです。



その神はまたイスラエルの民に対して、

「私はおまえたちの神である、おまえたちは私の愛する民である。」

という、神と民との非常に熱いハートの通った信愛関係がそこに成り立っている。

「よその民族のことは知らない。それぞれの神様がいるだろう。しかし、イスラエルの民族よ、あなた方にとっては私をおいて他に神はないのだ。なんとならば、私はお前たちを助けたのだから、私から離れては、お前たちは実に惨めなのだ」

という言い方です。そういう私の民であるあなたがたはどういう姿でいて欲しいかと。

「私が聖であるようにあなたがたも聖であつて欲しい」

と、こうきたわけです。これは大変なことです。聖なんていうのは神様だけの属性ですよ。あなたがたの中で「私は聖です」と言える人はありますか。聖子ちゃんという名前もありますけれども、親の願いが込められているのでしょうか、人間は本当のところ、絶対に聖ではあり得ない。自分は聖だという人を私は信用しません。そんなに人間は聖になり得ない。しかし、神様からは、

「私は聖である。お前も聖であれよ」

という神の願いが込められているのです。皆さんはまだ子供を持っていないから分からないでしょうが。皆さんは子供さんと親からいろいろなことを言われているでしょうけれども、親は、

「私の子供じゃないか、そんな馬鹿なことをするはずがない」

と言います。非行に走った子供たちが親のところに連れて来られると、

「私の子に限ってそんなことをするはずがありません」

と、親は言うそうです。そうではなくて、「やはりやりましたか」と言う親はこれはだめですね。

「他の人は信じてなくても私だけは子供を信じています」

というのが本当の親の心です。皆さん、人の親になられたら分かります。それがこれなのです。神と民との関係はそういう絆で結ばれている。だから、

「私は聖である。お前たちも聖であつて欲しい。いや、なれるよ。私がしてみせるぞ」

という神の熱愛なのです。熱愛の言葉です。戒めに見えていますけれども、これは全部そういう意味で、

「私は外ならぬお前の神ではないか、お前はかくあるはずだよ」

と。「こうであらねば。これ以外にはあり得ないではないか」という宣言、呼び掛け、そういうふう to 受けとります。その中身は、第一は「聖」ということが出てきております。

その次は、

「父と母を敬え」

それから、



「安息日を守りなさい」

と。ここまでは縦の関係です。神様との関係なのです。父母との関係も、実は神様との関係という縦の関係の中に入れていることに注目して欲しい。私はさきほど、夫妻という横の関係、これが社会の単位であると申しました。個人の尊厳ということ、個人が尊ばれるということ、そして社会の単位としては夫婦が中心だということを申し上げました。それでは、父母という上の関係はどうなっているのか。「キリスト教は親孝行なんかしないで良いと言っているのか」と、戦前、誤解されたこともあるけれども、ここにも「父母を敬え」とありますように、父母無くして自分の存在はない。そういうわけで、「父母を敬う」ということは「神を敬う、信じる、尊ぶ」ということとイーコルの位置にあるということです。これをちよつと申し上げておきたいと思います。

それから次の、穀物を収穫するとき以下は、隣人関係です。貧しい人がいます。しかし、貧しい人にもプライドはあります。物乞いをしたくない、そういう貧しい人たちが惨めな思いをしないで自分に必要な物を手に入れることができるように、麦刈りをした後、麦の稲穂を残しておく。ぶどうの収穫があつたときにはぶどうを残しておく。「残っている物を取る」ということは、神によつて許され保証されていたのです。ですから、

「貧しい者や寄留者（外国人）のために残しておきなさい」

と。それから後は盗みだとか偽りだとか、今で言う刑法的な内容のことです。それから、

「雇い人の給料をしつかり払え」

と。一見、何でもないことのようにですが、えてして小規模の経済単位の雇い主という者は雇い人の給料を不払いして、踏み倒してしまうことがどの社会にも見られるわけです。それに対して、

「雇い人の労賃はその日のうちにちゃんと払いなさい」

というようなことが言われています。それから、体の不自由な人は昔は軽蔑されました。それに対して、

「耳の聞こえぬ者、目の見えぬ者を大切にしなければならぬ。私は主である」

そういつたことがずつと出てきます。最後にまとめとして、

「自分自身を愛するように、隣人を愛しなさい」

これが最も大事な戒めなのです。自分自身を愛するというのは人の本性です。人は放つておいても自分をかわいがります。そのように、

「隣人を愛せよ」

と、これでレビ記19章が終わっているわけです。

●6、人と神の関係——申命記10・12～21

それから同じようなのが次の申命記に出ておりますので、ちよつと見ておきます。申命



記もレビ記と年代的にはほぼ同じような時期ですけれども、実は紀元前621年にイスラエルでは一つの宗教改革がありました。その前後の作品だと言われています。読んでみますと、

「イスラエルよ。今、あなたの神、主しゅがあなたに求めておられることは何か、ただ、あなたの神、主を畏おそれてそのすべての道に従って歩み、主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え、わたしが今日あなたに命じる主の戒めと律法おきてを守って、あなたが幸いを得ることではないか。見よ、天とその天の天も、地と地にあるすべてのものも、あなたの神、主のものである。主はあなたの先祖に心を引かれて彼らを愛し、子孫であるあなたたちをすべての民の中から選んで、今日のようにしてくださった。心の包皮ほうひを切り捨てよ。二度とかたくなになつてはならない。あなたたちの神、主は神々の中の神、主なる者の中の主、偉大にして勇ましく畏るべき神、人を偏り見ず、賄賂わいろを取ることをせず、孤児と寡婦の権利を守り、寄留者きりゆうしゃを愛して食物と衣服を与えられる。あなたたちは寄留者を愛しなさい。あなたたちもエジプトの国で寄留者であった。あなたの神、主を畏れ、主に仕え、主につき従ってその御名みなによって誓いなさい。この方こそ、あなたの賛美、あなたの神であり、あなたの目撃したこれらの大いなる恐るべきことをあなたのために行われた方である」(申命記10・12～21)

モーセが民に語り伝えた内容ということでこういうふうに記しるされているわけです。この内容ですが、さきほどのレビ記と非常に似ています。やはり、神と民との縦の関係、これを基本にして語られています。人間という者は非常に尊い存在です。ところがその人間が人間として全うまっとうな道を歩いて行くためには、導き手がいます。さきほど、

「人間は霊を吹き込まれた存在だ」

と言いましたが、その人間の中に宿っている霊が神の霊と結びついて、この導きの通りに歩いて行くならば、全うまっとうな道を行くことができる。しかし、これがあらぬ方に心引かれて神とのつながりが切れてしまうと、どこに行くか分からない。これが聖書が語っていることなのです。

さきほど、創世記2章17節の中でわざと触れなかったのですが、

「善悪を知る木、これから取って食べてはならない。これを取って食べると必ず死ぬ」

と、非常に謎なぞめいたことが書かれていました。あれはどういうことかと言いますと、「善悪を知る木の実を食べる」ということは、

「神との関係を断ち切つて、自分で善悪を判断して、自分の力で歩いて行く」という方向を意味しています。それで、蛇がアダムを騙だますのですが、

「あなた方は決して死ぬことはありません。あの善悪を知る木の実を食べると



賢かしこくなつて、神のようになれるのです」

と言うのです。それで、その言葉に誘われて、木の実を食べてしまうわけです。善悪を知るということ自体は大事なことです、

「自分が神の如くなつてしまふ」

それが恐ろしい。人間というものは、人間であらねばならないのです。人間は、限りなく神の方からいろいろな良きものをいただく存在です。

私は人間というのは真・善・美を追求していく存在だと思っています。そして、人間の本質は何かというと、「愛」である。活動としては真・善・美を追求し、本質的には愛であるという、こういう人格が人間の本来の姿だと思っています。

善悪を知る木の実を食べて、

「神なんか要らないよ。私は一人立ちをするのだ」

と独立宣言をしますと、あらぬ方向へ進んで行く。それはいろいろな宗教が表しています。おのれおのれごうまんが傲慢になります。そうしますと、

「神に代わつて世界を征服しよう」

とか企くわだてたりします。善悪を知る木というのは非常に意味が深いわけですが、今の申命記しんめいきを読みまして感じますことは、

「人間は神との関係を断ち切つてはならない」

ということ。その神は、本当に人間が全存在をその前に投げ出して畏敬いけいする神、相対的な人間に対して絶対的存在として臨みのぞ、しかもそれを導き祝福を与える見えざる神です。

絶対者という言葉はあまり好きではありませんが、イスラエルの宗教は、

「絶対べつたいに神を形造かたちぞうつてはならない。偶像べうぞうを造つてはならない。目に見えない神だけを信ぜよ」

と言う。大変きついことです。いかなる像をも作つてはならない。そういう目に見えない神に導かれつつ進んで行く。そうしたら、何が抛より所になるかといえば、言葉なのです。

「初はつめに言ことばありき」

というように聖書の言葉なのです。この言葉が聖書というような文書で記しるされていく。啓示けいじの言葉ということでしょう。

そういう言葉というものを抛り所にしながら、見えない神に導かれて歩んで行く。その抛り所として聖書が残されているという構造だと思います。そういうことをこの申命記もよく表していると思います。

●7、真理はあなたを自由にする——ヨハネによる福音書80・31〜47

それから、新約聖書の「ヨハネによる福音書」の方にいきます。ヨハネによる福音書というのは、成立年代からいいますと、だいたい紀元後90年〜125年ぐらいの間に書かれた書物



だと学者は言っています。いうまでもなく、イエス・キリストという方のことを中心にしながら、その言葉、行為を記しています。8章ではユダヤ人との問答です。簡単に申しますと、ユダヤ人はキリストがなさった、ある病人に対する治癒の業、それがたまたま安息日になさった。ユダヤ人にとつては、安息日は休まねばならない。第七日ですから。ところがキリストは休まれなかった。安息日にも病人を癒したり、苦しんでいる人を助けたりされた。キリストは、

「神様は人を活かす方だ。病気で苦しんでいる人を安息日に活かしてあげることは正に神の御意ではないか」

と言われた。それに対して、ユダヤ人は律法に反すると言つて、キリストを殺そうとした。そういう背景があります。そこで、問答が始まりました。その問答は、

「真理とは何か、自由とは何か、罪とは何か」

そういう非常に内面的な問題が取り上げられていますので、ちよつと長いですが、読みます。

「イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする』」（ヨハネ8・31～32）

と。

「真理を知るならば、本当に自由になる」

とあります。私が留学しておりましたフライブルク大学（ドイツ）の赤レンガ建築の講堂の壁面の一番よく見えるところにこの言葉が大きな大文字の金文字で書かれていました。

「DIE WAHRHEIT WIRD EUCH FREI MACHEN.」

「真理は君たちを自由にするのだ」

という言葉が刻み込まれてありました。

「すると、彼らは言った。『わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。』あなたたちは自由になる」とどうして言われるのですか』イエスはお答えになった。『はつきり言っておく。罪を犯す者は誰でも罪の奴隷である』」（ヨハネ8・33～34）

この「自由」ということをイエスが言われた。そこで、ユダヤ人たちは、

「自分たちはアブラハムの子孫で自由ですよ」

と言った。キリストは

「そうじゃない。あなた方の内面は実は不自由だ」

とお答えになった。どういう意味で不自由かといえば、

「あなたがたは罪を犯す。罪の奴隷である。自分でどんなに自由であろうとしても、この罪の縄目から逃れられないではないか」



ということを言っておられる。このことは非常に私たちにも身につまされる思いがいたします。それから、飛ばしまして、

「もし子^こがあなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」(ヨハネ8・36)

「子」というのはイエス御自身のことを意味しています。イエスだけが本当に「神の子」として自由だった。一言申し上げますならば、実は神の子だから自由なのではない。イエスという方の存在はさきほどのレビ記とか申命記を地であっておられた存在なのです。

イエスという方は神のことを「父」と呼んで、自分のことを「子」と自覚する。また、神のことを「主^{しゅ}」と呼んで自分は「僕^{しもべ}」として自覚する。

そして、イエスという人の在り方は神様がオール(英≡すべての)なのです。神様が存在の根源、すべてなのです。そして、

「自分はその御意^{みこころ}を行う」

という、それだけがキリスト・イエスの生きるプリンシプル(英 principle 原理、道)、生き方だった。

別の言い方をすれば、己^{おのれ}がない。無私^{むし}なのです。私心^{ししん}がない。エゴがない。エゴイストではなかった。神の意^いだけが自分の意だった。そういうイエスが実は自由だった。ユダヤ人は「私は自由だ」と自覚しているのですが、実は不自由だった。それは神の意^いを行^ぎじていない。なぜ、行じていないかと言えば、神の意を行じているイエスを殺そうとしているではないか。そこにはつきりと現れている。こういう問答がここに続いているわけです。

『あなたたちがアブラハムの子孫だということは、分かっている。だが、あなたたちはわたしを殺そうとしている。わたしの言葉を受け入れないからである。わたしは父のもとで見たことを話している。ところが、あなたたちは父から聞いたことを行っている。』

彼らが答えて、『わたしたちの父はアブラハムです』と言うと、イエスは言われた。『アブラハムの子なら、アブラハムと同じ業^{わざ}をするはずだ。ところが、今、あなたたちは、神から聞いた真理をあなたたちに語っているこのわたしを、殺そうとしている。アブラハムはそんなことはしなかった。あなたたちは、自分の父と同じ業をしている。』

そこで彼らが、『わたしたちは姦淫^{かんいん}によって生まれたものではありません(「不義の子ではありません」)。わたしたちにはただひとりの父がいます。それは神です。』と言うと、イエスは言われた。『神があなたたちの父であれば、あなたたちはわたしを愛するはずである。なぜなら、わたしは神のもとから来て、ここにいるからだ。わたしは自分勝手に来たのではなく、神がわたしをお遣^{つか}わしになったのである。わたしの言っていることが、なぜ分からないのか。



それは、わたしの言葉を聞くことができないからだ。あなたたちは、悪魔である父から出た者であって、その父の欲望を満たしたいと思っている。悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。』(ヨハネ8・37、44)

これは非常にきつい言葉ですね。

「あなたたちは悪魔である父から出たものである」

という。待ってくださいよ、わたしたちは神に造られた者ではありませんか。創世記にちやんと書いてあります。生命の息を吹き込まれて、内的には神から出た者だ。そのはずなのにイエスから、

「あなたたちの父は悪魔だ、あなたたちは悪魔から出た者だ」

と言われた。一体これはどういうことですか。それはさきほどここで、

「人間という者はいつしか神を見失って、自分の勝手気ままに動き出した。そのとき悪魔が忍び寄って来て人間をうまく自分の手下にしてしまった」

と申しました。自分は気づいていない。自分は気づいていないのだけでも、いつのまにか悪魔の手下になってしまおうという自分に、あるとき突然に気づいて、愕然とするのが我々の本来の姿、日常の姿です。そういう体験というのはそう簡単にできるものではありません。自分ということに関して悩んだり、自分は本当にこれで良いのだろうか、悩んだり、いろいろなことで皆さんがこれからいろいろな悩みにぶつかられるときに、

「そうだ、自分というものは、自分が主人になっていた。本来の主である方は別に在るはずだ。神に造られた者は、神に従って生きるのが本来の生き方なのに、いつしか己が主人になっていた。そこに落とし穴があった」

と。そのことに気づきますと、この言葉が甦ってくるのですね。いろいろな特にキリスト教の歴史上の人物で言いますと、キリスト教の中で名を残した人はみんなこの問題で苦しみました。たとえばルターがそうです。

「自分はどうしたら本当に神の前に正しい人間で在り得るのか、神の前に聖なる者で在り得るのか」

と、本当に悩みに悩み抜いて、とうとう彼は修道僧のときに独房の中で気絶してしまっていたという。そして、

「そうだ、人間が人間を救い上げることができない。自分で悟りを開くことはできない。もう一度神の恩恵の前に立ち返ろう」

といって、彼は内的な転換を経験して、それが宗教改革につながっていくことになったのです。その他いろいろな方の伝記を見ましても、この問題を経験している。それがここに書かれています。

「悪魔が偽りを言うときは、その本性から言っている。自分が偽り者であり、



その父だからである」(ヨハネ8・44)

こんなことを言われたら良い気持ちのする人はありませんよね。ぐさつと刺さると思います。けれども、刺さったときに、本当にそうなのかどうなのかということを考えてみるのは、いいことではないでしょうか。飛ばしまして、

「神に属する者は神の言葉を聞く。あなたたちが聞かないのは神に属していないからである」(ヨハネ8・47)

こういう言葉で結ばれています。

●8、御霊の導きによって愛の人にされていく——ガラテヤの信徒への手紙5・13～26

次に、新約聖書のガラテヤの信徒への手紙、これはキリストの使徒となったパウロの手紙ですが、紀元後51年頃に書かれたパウロという人の手紙です。ここにさきほどの罪の問題とか、自由の問題、愛の問題がみごとに描き出されていますので、これを引用いたしました。さきほど、

「子があなたたちを自由にすれば、あなたたちは本当に自由になる」

とありました。その自由ということをパウロは引いているわけです。もちろん、パウロはヨハネによる福音書が書かれる前にこの手紙を書いているのですけれども。

「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」(ガラテヤの信徒への手紙5・13～14)

この一句はさきほどのレビ記19章18節にありました。それを引いています。ここで「肉」という言葉が出てきます。肉というのは何かと言えば、生まれながらの人間性という意味、エゴイズムという心の働き、そういうものだと思っただければ良いです。それから「霊」という言葉が次に出てきますが、「神の霊」という意味合いをもった霊という言葉です。

「わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。

そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。しかし、霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。肉の業は明らかです。それは、**姦淫**、**わいせつ**、**好色**、**偶像礼拝**、**魔術**、**敵意**、**争い**、**そねみ**、**怒り**、**利己心**、**不和**、**仲間争い**、**ねたみ**、**泥酔**、**酒宴**、その他このたぐいのものです」(ガラテヤの信徒への手紙5・16～21)

よくこれだけいろいろ並べられたものだと思いますね。これが肉の業です。



以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は神の国を受け継ぐことはできません。

「これに対して、霊の結ぶ実^みは愛であり、喜び、平和、寛容^{かんよう}、親切、善意、誠^{まこと}実^{まこと}、柔和^{にやわらか}、節制^{せつせい}です。これらを禁じる掟^{おきて}はありません。キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったりするのはやめましょう」（ガラテヤの信徒への手紙5・21～26）

これはもちろん、ガラテヤにいるキリスト信者たちに宛てられた手紙ですから、こういう内容ですが、ここで、

「霊の導きに従って歩もう」

ということが、書かれています。霊の導きを捨てて自分本位で生きて行くと、いつのまにか肉の業になってしまふ。もう一度、霊の導きに自分を委ねて生きるならば、その結ぶ実^みは愛であるとあります。愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制という非常に素晴らしい徳目^{とくもく}があります。ですから、ここで言われていることはいわゆる自力の修行だとか、断食だとか、いろいろな行^{ぎやう}によつて段々自分を立派にするというようなことは書かれていない。

ここで書かれていることは、霊の導き、聖書でいうならば、キリストという霊、キリストに現れた神の霊、こういう霊の導きに自分を委ねて歩んで行くならば、いつしかその人はこういう姿、人格とされていく。「されていく」というのが、大事なのです。

「自分であつた」という人は必ずそれを誇りますよ。己^{おのれ}の修行で立派になったら、そうでない人を裁きます。ところが、自分がされていったならば、何も自分で威張るところはないわけです。そこところがさっきの「己が立派になると、己を神にする」道です。しかし、導かれてそうなつていったならば、どこまでもやはり神の前には幼児^{おさなご}にすぎないという謙虚^{けんきょ}な姿であります。これが大事なことです。神の前に謙虚である人は隣人に対しても謙虚です。また、神の前に謙虚な人は、神からいろいろな良いものをいただきますから、それが隣人にも伝わっていくわけです。

神は愛である。その愛がいっぱい流れてきているならば、隣人を愛さないではいられないという。それが第二の本性になるわけです。キリストはそんな人です。愛さないではいられないという本性です。

それに対して、神無き世界に生きていますと、いつしか物質とか欲望の奴隷になつてしまつて、いらいらして他人を征服^{せいふく}したり、収奪^{しゆうだつ}したりいじめたり、そういうことがその人の本性になつてしまひます。

「それが悪魔を父とする姿だ」



とキリストは言われた。そんなふうに見ますと、ここに書かれていることは、昔々の我々の知らない遠く隔たったところで語られ受け継がれてきた事とはとても思えない、非常に現代的な鋭さをもつて我々に迫って来ているのではないか、というのが私の感想なのです。

そして、さきほどの世界人権宣言の底に流れている思想はこれではないか、脈々というところに実を結んでいるのではないか、ということをお願いしたいわけです。プリントの世界人権宣言のところを見ていただきますと、その前文を引用しました。これは1945年に作成された国際連合憲章の前文を引用したものののですが、

「国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権、人間の尊厳及び価値

並びに男女の同権についての信念を再確認し、……」（世界人権宣言前文より）

こういう書き出しで始まっています。このことを全世界の政府、諸機関、教育に携わる者すべてがこれを目指して努力しようということが書かれています。そして第一条が、人間は、自由、尊厳と権利とについて平等、それから理性と良心とを授けられていること、同胞の精神——これはさきほど言いました愛の精神ですね——こういうことが言われていますし、第16条では家庭のことが言われています。そして、第18条、すべて人は、思想、良心及び宗教の自由を享有する権利を有する……、とあります。

今日、申し上げたのは非常に内面的な真・善・美あるいは愛といったものを追求していく、そういう姿です。それを理想として追い求めていくところに人間の本当の尊厳の実質があるのではないか。単に神から造られたものだから人間は尊いということに止まらず、それにふさわしい姿であることに人間の尊厳の本当の内実があるのではないだろうか。

そういうことを、これからいろいろなものを勉強される出発点に当たって、皆さんに訴えたかったわけです。それでは私の今日の講義はこれで終わることにいたします。



資料 「世界人権宣言」

(1948・12・10 第3回国際連合総会において採択)

国際連合の諸国民は、国際連合憲章において、基本的人権、人間の尊厳及び価値並びに男女の同権についての信念を再確認し、……。(前文より)

第一条

すべての人間は、生まれながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもつて行動しなければならない。

第二条

1 すべて人は、人種、皮膚の色、性、言語、宗教、政治上その他の意見、民族的若しくは社会的出身、財産、出生その他の地位又はこれに類するいかなる事由による差別を受けることなく、この宣言に掲げるすべての権利と自由とを享有することができる。

2 さらに、個人の属する国又は地域が独立国であると、信託統治地域であると、非自治地域であると、又は他のなんらかの主権制限の下にあるとを問わず、その国又は地域の政治上、管轄上又は国際上の地位に基づくいかなる差別もしてはならない。

第三条

すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する。

第六条

すべて人は、いかなる場所においても、法の下において、人として認められる権利を有する。

第七条

すべての人は、法の下において平等であり、また、いかなる差別もなしに法の平等な保護を受ける権利を有する。すべての人は、この宣言に違反するいかなる差別に対しても、また、そのような差別をそそのかすいかなる行為に対しても、平等な保護を受ける権利を有する。

第八条

すべて人は、憲法又は法律によって与えられた基本的権利を侵害する行為に対し、権限を有する国内裁判所による効果的な救済を受ける権利を有する。

第十二条

何人も、自己の私事、家族、住居若しくは通信に対して、ほしきままに干渉され、又は名誉及び信用に対して攻撃を受けることはない。人はすべて、このような干渉又は攻撃に対して法の保護を受ける権利を有する。

第十三条

- 1 すべて人は、各国の境界内において自由に移転及び居住する権利を有する。
- 2 すべて人は、自国その他いずれの国をも立ち去り、及び自国に帰る権利を有する。



第一五条

- 1 すべて人は、国籍をもつ権利を有する。
- 2 何人も、ほしいままにその国籍を奪われ、又はその国籍を変更する権利を否認されることはない。

第一六条

- 1 成年の男女は、人種、国籍又は宗教によるいかなる制限をも受けることなく、婚姻し、かつ家庭をつくる権利を有する。成年の男女は、婚姻中及びその解消に際し、婚姻に關し平等の権利を有する。

- 3 家庭は、社会の自然かつ基礎的な集団単位であつて、社会及び国の保護を受ける権利を有する。

第一七条

- 1 すべて人は、単独で又は他の者と共同して財産を所有する権利を有する。
- 2 何人も、ほしいままに自己の財産を奪われることはない。

第一八条

すべて人は、思想、良心及び宗教の自由を享有する権利を有する。この権利は、宗教又は信念を変更する自由並びに単独で又は他の者と共同して、公的に又は私的に、布教、行事、礼拝及び儀式によつて宗教又は信念を表明する自由を含む。

〔奥田昌道先生講筵5 『「人間の尊厳」の根底にあるもの』 1996年8月24日京都キリスト召団発行より転載〕

